

シリーズ[§]『青松』を読む[§]③

手づくりで偲ぶ¹⁾

——国立療養所大島青松園関係史料の保存と公開と活用に向けて——

阿部 安成

series[§]『青松』を読む[§]①手づくりで始まる、wps243、2015.12

series[§]『青松』を読む[§]②手づくりで詠む、wps244、2016.01

2015/4/5 瀬戸内海に霧

第4号 題字と巻号数（「第四巻」）が左から右への横書きとなっている^{おもて}表表紙は、前号のそれに似ている。題字右に「昭和二十年二月発行」と縦書きで記載があるのも前号におなじ。サインや押印は、「高橋」のいわゆる三文判のみ。

前号（1945年1月）から1か月しか経っていない1945年2月の発行となった本号。刊行間隔をまもって月刊をはたしたということか。

裏表紙には「廻順」が記されている——「笠井誠一様／松田美津夫様／芥木操様／小見山和夫様／藤田薫水様／少年室様／少女室様／長田穂波様／田根正夫様／綾井讓様／喜田正秋様／太田井春峰様／泉俊夫様／香山爽子様／浅野繁様／戻り勉／六号は上本隆重氏追悼号として編輯は綾井讓氏／原稿^メ切三月末厳守」とある。これまで女性の執筆者がひと

1) 本稿は2015年度日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究C「20世紀日本の感染症管理と生をめぐる文化研究」(JSPS 科研費 26370788、研究代表者石居人也)、2015年度滋賀大学経済学部学術後援基金研究テーマ「歴史資料の保存と公開と活用の実践論」、2015年度滋賀大学環境総合研究センタープロジェクト研究「療養所環境を交せる」の成果の1つである。

りもいなかったもので、回覧順に女性の在園者が入っているところがめずらしい。また、ここですでに次々号の予告と原稿募集がなされていた。

表表紙見返しには目次。題目と執筆者名をあげよう——巻頭言、荒木暢夫「追悼短歌会」、総代石本俊市「憶ユ久米良寛氏」、土谷勉「忠魂に祈る」、長田穂波「悼、久米良寛氏」、喜田正秋「久米さんを悼む」、泉俊夫「故久米さんを偲びて」、大田井敏夫「短歌作品」、田根正夫同前、笠井誠一同前、浅の繁同前、斉木操同前、小見山和夫同前、綾井譲同前、藤田薫水「俳句作品」、松田美津夫「詩作品」、斉木操「創作 正夢」、青山荘主人「随筆」、香山爽子「俳句作品」、長田穂波「島庵独語」、笠井誠一「短歌作品」、浅野繁同前、笠井誠一「愚感」、田根正夫「短歌作品」、喜田正秋「自句自解」、戸田次郎、中島勇、庫元和枝「大島学園綴方」（「笠井」や「浅の」などの人名表記は原文のままとした）。

青山荘主人の「随筆」からまたノンブルがうたれているようだ。

挿絵ということなのだろう、なにかから切りとられた「亀山上皇 高橋観石筆」のキャプションがついた絵が貼られた原稿が、目次のつぎに綴じられている。

巻頭言　そして土谷の「巻頭言」——「療養のあけ暮れが前線将兵の鮮血によつて稼がれてゐる事に想到すれば、一刻たりとも無駄には出来ぬ。実に貴重な一分一秒である。／只今に於て全力を尽し、悔を残さぬのが吾国の武士道である。／吾々の日常は朝々いたゞく一碗の麦飯と味噌汁に先づ感謝の至誠を捧げる処に始まり、そして夕べに悔を残さざるをこそ希む次第である。㊦」——療養所内であっても、その日々の暮らしが戦争に直結しているという。

この1ページは、罫目が印刷された原稿用紙の裏に記されている。原稿用紙の欄外には、「大和製品」の印字がみえる。

追悼　「規格 B4」と印刷された縦罫紙3枚半の冒頭欄外に、「牧野大尉殿／久米良寛殿／追悼讃仰歌会詠草（於荒木暢夫氏方／昭和二十年二月十一日）」と記してある。ペン書きの文字ははっきりとした楷書で一貫している。罫の内側には1から41までうたれた番号のしたに1首ずつが記されている。ひとりで複数の歌を詠んだものもいるし、歌を寄せたものには女性もいる。歌のあとに記された○のついた数字の番号の指し示すところがわからない。

「入園者総代」の肩書がついた石本俊市が寄せた「噫 久米良寛氏」は、「“久米良寛氏が戦病死された”との事を承るや、私は直ちに園内ラジオを通して病友一同に報じた」と書きだす久米の追悼文である²⁾。久米とは「当園を退職され、全病友が惜別の情をおさえて西海岸にお見送りしたのは忘れもしない昭和十七年四月十五日であった。〔中略〕久米家は私達にとって決して忘るる事の出来ない深い御高恩のあるおうちである。即ちお父さんは書記として、お母さんは名看護婦長として、また良寛氏御夫人も白衣の天使として私達のため直接愛の労をおとり下さった。即ち父子二代いづれも御夫婦共に私達が一方ならぬ御厄介になった御恩家である」とかえりみられた療養所の職員だった。「斯の如く全病友の脳裏に深く刻みつけられてある久米氏のこととて、決して他所事とは思はれず、その訃報を聞くや直ちに病友達にも知らさずには居られず、病友が心から惜しんだ理由も此処にあり、亦貧弱ながらこの“青松”を“追悼記念号”として出すに至った所以である」ということだった。

久米そのひとはというと、「御在職中は精神誠意私達のお世話をして下さいましたもので、その誠意は私達の食膳に毎日あきらかに現れて、私達を飲ばせて下さった。野球が上手、芝居がうまく此の方面でも私達を慰め、且親しんで下さった」という職員だった。

この石本の稿は、解体された本のページの裏面に、謄写版で罫目が刷られた原稿用紙に記されていた。それは句歌集のようだが、書名や著者名はわからない。

土谷勉の「忠魂に祈る」によると、「久米大兄が名誉の戦病死された。何気なく展げた新聞紙であつたゞけに、まこと夢のやうな気持で何度も見直したことである」と、その訃報を新聞報道で知ったという。土谷は、「思へば久米大兄から友だちの一人として附合つて貰つたことが嬉しい。身近に靖国の神を一柱持ち「久米さん」と親しげに呼ぶことが出来るのだもの——。これは無上の光栄だし、誰に何処でゞも吹聴し誇り得る盛事にちがひない」とまで記す。役所の職員との交流をめぐるよろこび、そして知己が靖国にいることを「光栄」とする感慨が綴られている。くわえて、「大兄と私とは年輩も頃合だし、同じ時世の教育を受けた関係で、属にいふうまの合ふ仲であつた」との好^{よしみ}もあつた。

²⁾ 入園者総代石本俊市については、ひとまず阿部安成『島で一ハンセン病療養所の百年』(サンライズ出版、2015年)を参照。

そうしたふたりは、「東大の河合栄次郎教授や蠟山政道教授（現代議士）の説に共鳴され、私が煮切らぬ自由主義者だといふと、ムキになつて弁護された。価値と価格の経済学的相違についてであつたと思ふが、西の浜の松の下で私と議論したことがある。大兄も腹を立てたし、私も怒つた。どちらも「此奴こんなにもわからず屋であつたのか」と愛想もつききてブリブリしながら喧嘩別れしてしまつた。大兄の説かどうであつたか、今ではもう記憶にないが、それでめて次ぎにはケロリと忘れ、冗談や洒落を飛ばして会へる仲であつた一事を思へば、なつかしくてたまらない」との深い交情が大切な思い出としてよみがえつたようだ。なかなか記録されがたい、職員と療養者との「仲」である。

ついで故人の「御功績」がふりかえられ、それが披露される——「文芸面から一、二拾ふと、先づ本県唯一の同人雑誌であつた“文芸民族”（中河与一指導）に青松園から故梅野、広田、私と三人も揃つて紹介され、そして、それから香川日々にも度々執筆し、拙いながら気を吐いたことは“文芸民族社”の志村大兄（県文学報国会散文部長）の御厚情はもとよりであるが、同窓であり親友である久米大兄の理解ある推挙が与つて大いに力あつての結果であつた。三人が県文学報国会員に推薦されたのもこの時であつた」とのこと。

大島の療養所内で文芸が盛んだったことはすでによく知られているが（たとえば、園内自治会の史誌である『閉ざされた島の昭和史—国立療養所大島青松園入園者自治会五十年史』大島青松園入園者自治会編、大島青松園入園者自治会（協和会）、1981年、の記述、など）、この「県文学報国会」と療養者のかかわりは、『青松』のこの記録以外にはまず記されていないだろう。同人雑誌『文芸民族』もいまのところ大島ではみつからない³⁾。同会の情報を追おう——「〔久米〕大兄が県文学報国会の短歌部幹事であつた関係上、藻汐短歌会は何彼につけ便宜を与へられ、鞭撻されたことも多かつた。このことは永久に忘れられぬと思ふ」というほどの強烈な体験となつていたのである。

故人の思い出はつきない——「大兄が食糧係を創意と工夫を以て勤められたことは、未

³⁾『文芸民族』を香川県立図書館の香川県内公共図書館横断検索、香川大学図書館 webOPAC、国立国会図書館 NDL-OPAC、日本近代文学館図書・雑誌検索で検索したところ、日本近代文学館のみヒットした（2016年2月13日検索）。同館では1巻1号（1940年2月）と1巻4号（1940年11月）所蔵。出版地は「神野村（香川県）」、出版者は「文芸民族社」。同誌については、阿部安成『「文芸民族」という場所—1940年に香川で創刊された同人誌を知る』（1）（『彦根論叢』第408号、2016年6月発行予定）を参照。

だに吾々の尽きない語草であつて、話の度に出ることである。珍しくない品も珍しく料理していただいたこと、この頃が第一番であつた。真実もつと御世話が願ひたかつた」。

いくつもの思い出は別れを深く惜しませる——「西の浜で御家族連れのお丁寧なお別れの御挨拶をいただいた節「もはや行つてしまはれる」と、誰もが一樣に黄昏のやうなうら淋しさを覚え、「もつと大きな舞台で、この人には力いっぱい働いてもらふのだ」と、強いて念ずることによつて漸く自らを慰めたのであつた」と惜別の言葉をつなぐ。

故人が偲ばれる——「翼賛会入りされてからも度々お便りに接した。いつも大兄の人柄が偲われ、奔放にして細密な気性はそのまま、応召、出征と、ビルマの最期の病床まで貫き通されたであらう。それは疲れを知らぬいつも若々しい気魄であつた。ビルマ方面にのさばる醜夷の何十か何百かゞきつと小さい大兄の手によつて屠り去られたであらう。何と痛快ではないか。お礼でも述べれば「まだ、まだ」と笑顔に紛らして、もう次の作戦に出て征かれさうである。靖国の杜深く護国の神として鎮りながら才気煥発な大兄である」と、故人が讃えられ、その反転として敵が醜夷と貶められ、「才気煥発な大兄」をまえにすれば、「私らの為すことをまだるつこく思うてをられるかも知れない」と^{へりくだ}遜って付度することとなる。

そして現時は戦時下だった——「心から英霊の冥福を祈りたい。大兄の霊に応へる道は已に克ち、敵に勝つことだと思つてゐる。B29 が日に夜に来襲せうとも、そんなことは問題でない。／御遺族の皆様の御多幸を祈るや切である」と稿は結ばれた。

その裏 この号は巻頭言のつぎからページのノンブルが記され（これを以下、号ノンブル、という）、さきの「牧野大尉殿／久米良寛殿／追悼讃仰歌会詠草（於荒木暢夫氏方／昭和二十年二月十一日）」が1～8（ただし7がない）、つぎの「噫 久米良寛氏」9～14で、土谷の「忠魂に祈る」には15～26のノンブルがあるが、この稿固有のノンブルも記され、そして抹消線が引かれているものもある。号ノンブル15は土谷稿ノンブル1（これを(1)とする）で抹消線、おなじく16（なし）、17(2)、18(3)抹消線、19(4)、20(5)抹消線、21(6)、22（なし）、23(7)、24(8)抹消線、25(9)、(10)のうえに26、となっている。1つおきに抹消線が引かれているのだが、どういふ必要があつてそうしたのか、それがなにをあらわすのかわからない。

土谷の稿の1ページめ裏面には、大田井敏夫の「久米良寛兄追悼詠」が記された紙が貼ってある。その紙面には薄く花の絵が描かれている。これもまた追悼の意匠なのか。短歌は2首——「戦ひは日毎厳しきかかる世に護国の神となりし「久米」兄よ／勝ち抜かむ一億御楯の胸深くやどり輝け君が御魂^{みたま}よ」。なお2首めには追記があり、もとは「君が御楯」となっていたところ、「君が」が線で消され、その脇に「一億」と追記されている。さきに書いたとおり、ここには号ノンプルの16が記されているのだから、これは裏面ではないということか。

号ノンプル22はタイプ印刷による文書(これまたどこかの編集局からの通信文書のように)のうえに紙が貼られ、そこに土谷の手によるとおもわれるペンで、水原秋桜子の俳句6句が記されている——「警報や寒月竹の穂を鳴らす／警報や雪一編の凍る石／警報の解けて夜明けの田の氷／雪嶺の朝やかならず鷹舞へる／冬の梅峡いづる瀬の瀧となり／枯れてより日々あたゝかしくぬぎ山」。「警報」に始まる俳句が3句つづく。これは空襲警報なのだろうか。そうだとすると、これらは戦時下に詠まれた俳句なのか。これは追悼詠のページではないのか。

号ノンプル26には4行分の原稿用紙片が貼られ、そこには土谷とは違う手によるとみえるペン書きで、「田根正夫／水仙花ほの匂ひつつ文机に君が御＝し笑まひ給ふに(久米様を偲びて)」とある。ここには土谷のペン書きが1行だけある。田根の短歌も添え書きにあるとおり追悼歌である。

原稿用紙 つぎが長田穂波の稿。彼が使った原稿用紙には、「発行」と「納本」の年月日が記入できるよう「昭和 年 月 日発行」などの印字、「毎月一回／十日発行」の印字、「昭和九年九月二十六日／第三種郵便物認可」の印字、「第 号(一)」の印字があり、刊行物の書名である「栄光」の印字もある。これは逐次刊行物(月刊)『栄光』の専用原稿用紙である。

おそらくこれは、大島青松園キリスト教霊交会教会堂図書室にある『栄光』とおなじ逐次刊行物なのだろう。いまのところ『栄光』は、同室にある1941年に発行された4部しか

所在が確認されていない⁴⁾。その編集兼発行印刷人の宮内岩太郎は、かつては大島療養所の職員だった。彼は高松東教会（高松東伝道教会）の牧師として『栄光』の刊行を担い、そこに長田穂波も寄稿していた。余った原稿用紙を転用したのだろう。

長田の弔文 長田の稿は「悼久米良寛氏」と題された。彼の「戦病死」は「園内ラヂオで放送され」た。長田はそれによる「衝動」と「哀悼」を、『あの歌人が?』彼の野球の選手であつた！彼の活撥で優しくあつた方が！と、故人をめぐる「思出」の「深」さを、複数の人物像として記した。さらに、故人の「御親父は看護員として更に書記として御尽力を頂き。御夫人は名婦長さんとして……我らの母として姉としての愛慕の的であられた」と、彼ひとりだけでなくその家族も大島の療養所に働き、それもまた故人の哀悼につながるといふのだった。故人は、「島で育たれ……二代にわたりての深き御恩を頂いた」と、顧みられたのだった。

長田はつづける——「食糧係りとしての久米さん！！／常に意想外の御馳走を食べさして頂き……面白い興味あるやり方……は何と言つても毎日の楽しみであつた。それだけ我らの生活に理解と同情とが深く持たれて居られたと感謝してゐる」、また、「何時か修養団の向上会に於て……我ら若い者は俺はコンナ事が出来る……と酒を飲み煙草をふかすと言ふ如きことをやる、それを自慢し易い、これは『生意気であり』修養の不足な結果で大いに反省し自誠を要すると思ふ！！／誠に有力な感話をせられて、今に耳底に残つて忘れないものがある……！」、また、「購買部へ、ハツタイ粉が何十貫と言ふ大量の入荷があつて、非常に島が賑つた事があつた……これは久米さんの御尽力である……と承つて喜悅したが、是は退職された後の話であつて、島を離れて後も常に我らの事を心にかけて居て下さつた事は有難いことである」——こらされた工夫が療養者のたのしみとなる、修養団活動のなかでの適切な訓戒⁵⁾、退職後もつづく慈しみ、これらが故人の徳であり恩愛というのだ。

⁴⁾ 所在が確認された号については、阿部安成「ゆくりなくも一国立療養所大島青松園キリスト教霊交会 2009年4月・5月調査報告」(滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.113、2009年6月)を参照。『栄光』の刊行期間は不明。『栄光』を香川県立図書館の香川県内公共図書館横断検索、香川大学図書館 webOPAC、国立国会図書館 NDL-OPAC で検索したところ、いずれもヒットなし(2016年2月15日検索)。

⁵⁾ 大島における修養団の活動についてはひとまず、阿部安成ほか「無教会と愛汗—大島青松園キリスト教霊交会の2つの精神」(滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.121、2009年12月)を参照。

なお、これらの文字が記された原稿用紙の欄外に、赤インクで「斉木」と署名の入った追記がある。前号第3号にもあったとおり、斉木は後年にこれら『青松』をあらためて手にとって感想を記していた。それがこの第4号にもあったのだ。彼はここに、「炊事人の私は“目玉焼”御献立で面喰らい班長の指導で病棟食に供し、病人も魂げた」と記した。

野球の思い出もある——「野球では職員軍の一方の将として甚だ有力で、実に能く戦われた。スポーツ精神も美しく、病友軍との接戦も真面目であり、すこしもキラワレなかつて誠に気持よく楽しく、明朗な時を過して島の大なる娯楽として期待する処であつた。活躍の勇姿は忘れ難い！」。

長田は、「今回追悼号として患者便り『青松』を出さるゝに当りペン執つての思ひ出は涙と共に無限である」とも記した。ただし、すでにみたとおり、この号は「巻頭言」からして追悼の意が籠められていたものの、とくに「追悼号」とはうたわれてはいなかった。とはいえ、寄稿者にとってこれは確固とした「追悼号」だったのだ。長田は、「御家族の御清健を祈り。／故人の御冥福を念じ上げ。／御高恩に感謝を捧げ奉る」と弔辞の末尾に記して、そのあとに惜別の短歌を載せた——「君が為め国の為めにぞ捧げたる日本男子のたふとき生命」（「追悼歌」）、「明星となりて誠をそゝがれしなさは尽きじ島の思出で」（「思ひ出の歌」）。

追悼 つぎの号ノンブル34の1枚には、「故久米良寛氏之英霊に捧ぐ 笠居誠一」の表題があり、5首の短歌が記されている——「興亡のこのみ戦に君の死は尊きものと思へと悲しき／南の戦に死にし君の仇赤毛の夷根こそぎに撃て／神去りし益良男君の荒英霊雪の降る日に還り来ませる／生還をきせじと征き君ゆえに朝夕は神に祈りしものを／いさぎよき死を念じて征きし故に今日の訪づれ聞くは悔やしき」。

この笠居の短歌は、「大島青松園」の名が入った縦罫紙に記されていた。

号ノンブル35から2枚は、喜田正秋の「久米さんを悼む」。喜田は故人との交流を、「野球の久米さんとして一般病友から親しまれ、殊に我々文芸に親しむ者にとってハ文芸研究会を俱に持つことに依つて親しく語合つた過去の想出が走馬灯の如く脳裏を去来する……」と懐かしんだ。そのひととなりはというと、「語れば弱点ばかり突きたがる男だ、負けん気の強い男だ、等と蔭口を叩きながらそれでゐて憎めない男、それが久米さんだつた」、

また、「見えぬ力でぐんぐん人を引ずって行く意思の人でもあつた」と顧みられた。喜田は久米の家族とも交流があつたとのことで、「久米さんのお母さんにもお世話になり、殊に奥さんには一方ならぬお世話になつてゐる私にとってハ哀惜の情又一入なものはある」と記した。そして最後に一句——「^{すだれ}簾なす雪解零や寮の窓」。

号ノンブル 37 からは、泉俊夫「故久米良寛様を偲びて」。彼は、「久米様と直に対つて御話しした事はありませんでした」という間柄だつたと明かしたうえで、けれども「教会などでは遠慮なく御話をし、又御聞きしたものです」と、故人とのあいだに日常の会話はなくとも信仰をとおした話の授受があつたというのだつた。泉はその稿のはじめに、「君すでにあらぬビルマは撃敵の砲声いよよ厳しさを加ふ」の1首をおいたそのあとの弔文を、「野球に教会にいつもニコニコと明るく朗らかな笑顔を見せて下さつてみた久米様」と書きだしていた。故人と野球とはすでにみたとおりの、ほかにもいくにんかが記していたところで、それにくわえ泉と故人のあいだには信仰を介したつながりがあつたというのである。そうした信仰の場への出席は、「久米様は当園を止められてからも教会などには時々御顔を御見せ下さいました」と、勤務や就業とはべつの領分だつたとみられていたのだつた。

退職後の教会での邂逅を「一つ記憶してゐるのです」という泉は、「或る年の暴風雨の過ぎ去つた秋の教会です」と記し始めた。彼が詠んだ「打ち上げし藻草に映ゆる陽の光り昨夜のあらしの思ほゆるかも」の1首に、「此の歌は結句が気に入らないけれど、僕は最初から眼に付いたから貰つた、園を止めてからいつも雨風や波の音を聞く度に島の事が思ひ出され、白い渚が眼に泛んで仕方がない、そんな故かとくに此の歌が眼に付いたと仰言つた様に記憶してゐます」と、故人の「忘れられない御言葉」をたどつたのだつた。

泉の稿には、執筆の日付であろう「二月十一日」との記述があつた。泉の稿は四枚。

つづく号ノンブル 41 は、浅野繁「この貧しき歌を久米良寛さんに捧ぐ」で、「戦ひの熱砂〔總〕しまくなかに斃れたる君をし恋ふる寒夜涯なし／ゆき征きて遂ひに斃れし君を恋ひ霜夜の冷えもうつつなく坐ぬ」の2首があり、そのつぎのノンブル 42 には、藤田薫水の「追悼句」3句——「世に出でし梅大輪の散る淋し／雲襲ふ御寮の岡の梅寒し／戸をくれば全く月の梅白し」。藤田の稿は、「多磨詠草紙」の名が入つた原稿用紙に貼られた紙に、記されていた。

そのつぎは、「10×20」の印字がある原稿用紙の罫目にきっちりと記された、綾井譲の「久米良寛氏を憶ふ」。ここには短歌4首が記されている——「身命を捧げて征きし君なるも病みて死にしか祖国恋ひつつ／還り来ぬ命思へば益良夫も遠く祖国を恋ひて死にけむ／美しき国に生れし幸ひを臨終も君は喜びにけむ／梅桜花は咲けども故郷に君の命の還る日やなし」。3つの短歌は故人の心情をうたい、1首は綾井の感慨を歌に託した。

この綾井の稿が記された原稿用紙は、中央余白に特徴のある記号が記されている。これはおなじ大島の療養者である長田穂波もよく使っていた原稿用紙である。

ここにはまた土谷の稿が貼りつけられている。とくに表題はない。

◎英霊に関する原稿は全部別紙に清書して一冊にまとめ、園長先生を通じて御遺族に差上げました。／それについて光田副婦長さんの御尽力をいただき、高松の荒木暢夫先生から／“追悼歌会”／47の歌稿をいただきました。／みなさんにこのことは御相談もする暇なくいたしました。／御諒解いただけるものと思つてをります。／——○——／^ちみなみに大兄が戦病死されたのは昨年九月三日でした。／そして新春六日に市役所から留守宅の方へ公報がありました。

——この綾井と土谷の稿のページには、号ノンブルがみえない（土谷の稿が隠しているか）。

号ノンブル 44 は、斉木操の「短歌」／散華せし久米良寛氏を偲びて」の表題のもと、短歌5首を載せる——「雪明るひそけき昼を臥りみて人の^{いのち}生命のはかなさ憶ふ／ゆくところ可ならざるなき君なりき定めし猛けくたたかひにけむ／該博なる話題を持ちし君がみて夜の更くるをも知らず過ぎにき（文芸放談会想出）／久米さんと親しくよびて文芸にスポーツに君と深く交はりき／頑張れと高く叫びて終始能く闘ひたりし捕手の久米さん（野球）」。文芸放談会、野球といった場面をおもいうかべて故人を偲ぶ。

号ノンブル 45 で、小見山和夫は「(短歌)／久米良寛氏の英霊を偲ぶ」の題で5首を詠んだ——「皇国のみ盾と散りし名とともに清に偲ばむ君が一世を／寒き夜の歌会の席にきびきびと励まし呉れしことも偲ばむ／松の葉の凍雪固き如月の家に還ります君がみ骨は／みいくさに死にせる君をまた言ひて病む身をひたに嘆かふわれは／日日伝ふ戦報ただならず胸熱く激ちくるものを耐へて病む我が」。ひとの死を自分の病とかからわせて詠う。なお、小見山の稿は、「十行 廿字詰」「コクヨの 165 規格 A4」と印字された原稿用紙に記されて

いる。

その裏には、46のノンブルがついた松田美津夫「詩“久米氏追悼の詩”」が記された紙片が貼ってある。

ビルマ！異国の空／砲煙 立ちこめ／太陽 暗く かげる処に／はるか 祖国に懐ひ走せ
つゝ／全身 全霊 捧げ得て／快しとは なし給ひしに／天のなせる業にか／はたまた 異
国の水の故にか／病床に再起の日 願ひ給ひしならむに／現世にありての誠忠 みち足れ
り……と／きく！我等 声なし……／只だに つつしみ／ありし日の温顔 しのびまつれ
ば／青松の園に唄ふ小鳥の声さびし／さあれ 東亜の人柱／日本男子の本望靖国の聖地
に／神静まります英霊よ。／つきせぬ感謝の祈りあるのみ……完

——ここにはみずから「東亜の人柱」にも「英霊」にもなれない「日本男子」からの、「靖国の聖地」に眠る英霊への「つきせぬ感謝の祈り」がある。

つぎの号ノンブルのないページには、林文雄の「追悼久米兄」6首——「二三度の面識のみが死后にしてその性を恋ふ奇しき友情か／連絡船に征く日見たりし大島をビルマの砂に大人ハ恋ひしか／碧空のパゴダ麓のきらめきに大島の海恋ひて病みけん／棗椰子かげの小さき真昼間か白鷺舞へる朝か大人逝ける／公報までの四ヶ月父を生けると請うひし家の思ふに耐えず／愛情の士尽忠の臣久米先生かゝる夫を父を誇るべし」。

号ノンブル 47からは、ふたたび斉木操による「(創作) /正夢」で、「之ノ一文ヲ久米良寛氏ノ御遺族ニ贈ル」の添え書きがある。記述の日付は、「二〇、二、十二記」。最終ページ(号ノンブル 60)の欄外に、「^マ寛^マ怒手ノ神経痛トペンノ故障ノ為乱筆ニ流レマシタ」との弁明がある。

林文雄 そのつぎ(号ノンブルなし)は、縦罫紙に2月(か?)9日付で、林文雄による大塚兄宛ての文章がみえる。

如何、早く元気になって下さい、祈ってゐます／寒いので今日は半日床の中です、ねて
ゐて／青森の内田守兄に手紙をかいた処です／御慰めする何もないが雪がふったのでそ
の模様を書きませう／「ゴハンヲタベテイルトユキガフツテキマシタ／マコトガユキユ
キトイヒマシタトンデイツテ／マドヲアケマシタオカアサンガサムイカラ／マドヲシメ
ナサイトイウトマコトハイヤダ／ユキヲミナガラゴハンヲタベルトオイシイ／ノダトイ

ヒマシタ」／これはうちの一年生の日誌帖からぬきました
 というもの。内田守は医師か。大塚兄は不明。この欄外には、「とじこみが悪くよみ難くな
 つたことを林先生始め皆様にお詫びします 勉」の書きこみがある。

8枚にわたる雪の文章のその末尾には、「林東風」の署名と、「よんであげたら土谷兄に渡
 し青松にのせて下さい」との括弧書きがある。

ここまでの林の稿には、1枚めに①と1のノンブルがあり、つづいて2から8までが記さ
 れている。これが目次に「○随筆（一） 青山荘主人」と記載されたページか。

そのつぎには、9からのノンブルが連続してつけられた切り抜きがある。それは、中谷宇
 吉郎「雪と爆弾」で、その欄外に「札幌の雪の話でもかくとよいのですがつかれるので代
 用」との手書きがみえる。これまた札幌生まれの林のペンだろう⁶⁾。記事の掲載誌は不明、
 その裏面には稿のノンブル10がうたれているが、記事には抹消の意味で斜線が引いてある
 (ノンブル11も中谷の執筆稿で、その裏ノンブル12の面にも抹消線あり)。

俳句 ついで林の稿から連続するノンブル13がうたれて、香山爽子の「俳句」が載る
 ——「著ぶくれていたわれみる盲かな／著ぶくれて海鼠の桶をかゝえくる／寒月や枯野
 つゞきの波がしら／飛行雲しだいにうすれ月冴ゆる／春寒や水仙水を吸ひ尽し／雪解や今
 日の佳節の旗戸々に／病む窓に梅ほころびし影ぼうし／裾野火の昏るゝ屋島嶺雨もよひ／
 島里に軍衣めづらし浅き春／子供等に畦焼かせつゝ麦踏めり」。

潮音 その裏はノンブルなしで、なにかの誌面（『主婦之友』か）に紙片を貼った原稿
 で、「◎潮音」と題されたコラム。かつて自治機関が編集発行した、『報知大島』という逐
 次刊行物には「潮風」と題されたコラムがあった。『青松』のこの「潮音」の筆者はおそら
 く土谷勉。

◎二月十三日が旧正月でしたね、お役所からほんとに思ひがけなく小麦粉と砂糖少量い
 たゞき、製造部で焼饅頭にしました。卵と人件ヒは協和会の負担／一ヶ二十八匁、一人
 二ヶ宛、五百八十一人分卵三〇〇ヶ入つてみました。人件ヒ八人分、総代さんがラジオ
 で事の由を報告し、「只今から取りにきて下さい」と、さて、その放送が済んだ時にはも

⁶⁾ 林については、おかのゆきお『林文雄の生涯—救癩使徒行伝』（新教出版社、1974年）
 があり、林の著作に、林文雄著、土谷勉編『天の墓標—林文雄句文集』（新教出版社、1978
 年）がある。

う製造部の前は行列であつたとか——。ワツと各部屋から歓声があがりました。どの顔もニコニコ。饅頭にかぶりついてはお茶をのみ、お茶をのんではかぶりつき、「時局柄此方からこんな豪華な願ひはとても出来ないが、お役所から下さることなら」と、たゞたゞ御配慮に感謝するばかり。「たべてしまふが惜まれる」とは誰やらの口——。その癖、口に持つて行くのが忙しい。

——とは、療養所での甘味をめぐるひと齣。ここにいう協和会が大島の療養所における自治機関の名称。総代がその代表。

島庵独語 つぎが長田穂波の「島庵独語」の第4回。ページノブルは林の稿からの連続。冒頭——

『青松』と言ふ名も嬉しい。巻頭言より後記に至る迄、内容も真剣味に溢れてゐる。第二輯は胸うたるゝ記事のみで、園内向けのみで終るのは勿体ない位である。たゞ職員側の投稿のないのが何となく物不足の感がする。用紙にいたりては断然時局色を現して、後日の好記念品となると思ふ。保存を望む！

とのこと。長田の願いがかなって、すべてではないにせよ、手書き手づくり『青松』は「保存」されて、まさに「後日の好記念品」となったのだ。

「国家の食糧問題」を記す長田は、「兎に角、現在ほど皇国の為め『祈らねばならぬ事が多い』時はないのです。／好きと嫌いの問題を越えて＝勝ちぬくため＝に十分に注意して熱禱すべきですよ！！／『この決戦下にヘンベンと皇国の御世話になるばかりで相済まない訳ですね……』」との決意を書き募った。この長田の稿はいつの執筆だったのだろうか。稿の2ページめには、「正月も過ぎて早くも如月となつた」と時候が記されている。

「この決戦下に」、長田は「徒らに皇国の粟を食ひつぶして居ります」とみずからを省みる。「十八歳と言うふ若年より」「三十七年の永年月」「何一つ御奉公も致して居りません」といわざるをえない自分なのだ。ほかの療養者も同様で、しかも「特に軽症な方は一入」で「癩を病む身の深刻な憂悩苦」があるという。そうしたわが身をふりかえる長田の勧めは、「併しながら私共は常に忍苦練成して……日本国民として素直な精神を持ちませう……心まで腐敗さしては全滅ですよ……たとへ兵隊になれずとも（島の日常生活）の上で出来る限り御奉公して下さい！！」である。

さらに長田は「積極的に御奉公の道がある」と説く——「島の実際生活よりして（有能の人が必要なの）です……未だ未だ私共の住む処を明朗化せねばならないと思ひます……それには人物が必要です！！」。こうした議論に対して想定される他者の言が記され、「あなたは総代をせられてゐられた相ですね……」——これに長田は、「それも実はマニアワセに過ぎなかつたのですが……島にも有為の人物の多からん事を痛感しました……単なる目先きの観念でなく、国家の為に島で尽すと、神の為に此処で御奉公すると言ふ……深長な基に確立してやつて呉る人が必要です。／志は深遠にして道は近くに有りますよ！！／新患者とは軽視する意味でなく私には希望をかくる人である。即ち未計算の人である」と長田はペンを走らせた。ここで引用にさいして傍点をつけた箇所は、傍点は原文では◎、傍点は○となって強調されているところである。

からだ 長田の稿はしばしば、「× × ×」といった記号を用いて稿の文章が分けられている。ここでもそれが使われて、あたらしい段落が「二月の三日は土曜日なり」と始まる。その日は朝から雪となり、それをもって、「灰色の空より、何と美しい純白なものが生れをちる事か！」との感慨が記された。雪の純白、美しさにうながされた長田は、「人よ、お前もその腐肉の中より、神の子の輝きを生み出して呉よ！」と書きとめた。さきにみた長田の、「日本国民として素直な精神を持ちませう……心まで腐敗さしては全滅ですよ」（下線は引用者による）との記述は、ただの比喩だったのではなく、「癩を病む身の深刻な憂悩苦」という語とかかわって、自己のからだをめぐる切実な危殆、もしくは切羽詰った現実としてあったのである。

つづけて長田は、「埃や塵や……糞便の上に落ちて、美しい花が開く……一切を『美化する生命力！！』／人よ、癩苦を美化して生命力を現せ」と、これはみずからにうったえたといつてよいだろう。

長田は、大島の療養所において、キリスト教信仰と、修養団運動とかかわる親和と努力の実践と、そして文筆による文芸や文学の展開の要にいた療養者である⁷⁾。彼の「腐」という自己認識はほかの媒体に掲載された稿でもしばしば記されている。それとかかわりここでは、「癩苦」や「生命力」といった語がみえる。長田の思索を考えると、この2つ

⁷⁾ 長田についてはひとまず、前掲阿部『島で』を参照。

の話は重要な鍵となるだろう。

戦時 長田は「決戦下」の様相も記録する——「敵機来襲は昼夜の別がなくなつた。恐れはセぬが、被害が心にかゝる、帝都が大坂がと案じらるゝ、夜半の情報もつい頭を挙げて居るのである。俺も矢張り同胞愛が確にあるらしい……社会を^{〔呪または詛か〕}「咀」つて居ない！！」。空襲という戦時の出来事とかかわって、それをうける療養所外の「社会」と、その「社会」に対する自己の思いとが綴られている。「社会」とは、療養者たちがしばしばいうところの、療養所の外にひろがる世界を意味していた。

「決戦下」を生きる療養者が気をとめる場所は、海外にもひろがる——「ヒリツピンの戦況が気にかゝる＝山下さん、しつかりしつかり＝と報道の度びに力が這入る。この一戦こそ天王山だ、あらかた見通しが附くやうにさへ想はれてならむ」とのこと。「山下さん」とは山下奉文だろう。

戦況に注意をはらう一方で、「戦争が済んで多羅腹甘いものを早く喰ひ度い＝甘い物喰ふ為めに＝など決して考へないぞ。そこ迄は腐つてゐないつもりだ！／然し何処か俺の内に甘い物慾しい奴が居ると言ふ事も偽れない……悪魔よ退ぞけ！！」と、素直に心情の一片をみせもしている。

愛国 第4回となる「島庵独語」の執筆は2月初旬で、長田は「紀元節を前」にして「御皇室に対して日本魂が燃ゆる者」だとの自覚をあらわす。ただし、「紀元節の次には旧正月で＝旧正月とは支那の正月である＝我国が支那の恩を受けしは真実であつて曆程に於て未だ『旧正月』とか節句とか保守されてゐる。／義は義とし。恩は恩としてこそ日本人であつて崇高なる民族たり得るのである」というとき、長田は「支那」を、そこからうけた「恩」においてとらえ、そして「愛国」を論じようとしている。「恩を知らぬのでない！／愛情が無くなるのでもない！」、だが「然し、恩より愛情よりも更に高きものに立ちて闘ふのが＝日本人であり聖戦である＝感傷的愛国心など片腹痛いものだ！！」と、いまの時世にふさわしい「愛国」を説く。「毎日の生活の道義心を守つて共同生活を破壊セぬ実践こそは真の愛国と言ふべきである」と、長田はとなえる。

協和会 2月はまた、「詰所役員の改選期が目前に迫つて来た」ときでもあるという。「詰所」とは、自治機関の執行部といったところか。

誠に＝やりにくい年＝総代初め各位の御心労に対して衷心より感謝申上る。／さあ次期の見通しは附かない＝今期以上にやりにくい＝としか思はれない！！／その、やりにくさは何処にあるか？／外よりの配給物品は、戦時下の事として社会の波の動きやうで、その増減は（苦情言ふても問題にならぬ。／たゞ職員の一層の御努力に信頼するのみ！！／併し我らの為さねばならぬ事が多い＝それは皆が自覚して真剣に慎しみ、本当に協力して迷惑をかけない事である＝蔭でツヽイたり、口先きのみの協力は駄目である……。／処が……。どうも裏切行為が多く、よい顔して蔭でツヽク者や、我儘して止めぬ我利亡者や、欠点ひろいや、役員を目の仇とする如き者や、一時の気まぐれ者や、等々はないか？

と、みずからを集団として律するときの難点があげられている。そのうえで、「一度び詰所の経験すると＝再度び立つことを嫌ふ心にするのは誰ぞ＝十分に我らは反省せねばならぬと思ふ！！／真剣に反省せぬと協和会は全滅するぞ！！」との忠告が書きつけられた。

長田は1943年3月より1年にわたって総代をつとめたことがあった。彼が亡くなったあとで、「算盤と政治が大嫌のだと自ら言っていた長田さんを、あの不自由な身体で長田さんを昭和十八年度に無理矢理に総代に引張り出して苦勞をかけたことは洵に相済まぬことであつたと思ふ」と顧みられた⁸⁾。わずかな期間ともいえよう1年のみではあるが、長田は「一度び詰所の経験」をしていたのだった。

文人 「決戦下」であるがゆえに、「＝勝ちぬきて万歳叫ぶ春よ来よ＝春よ来よと祈りつゝ戦勝の暁を待つてゐる、『健康』で祈りぬき生きぬき度いものである」と記したとき、なかなか生きづらかつたであろう戦時の療養所において、祖国の「戦勝」にとどまらず、『健康』で祈りぬき生きぬくことが望まれている。ここにいう、わざわざ二重鍵括弧がつけられた「健康」の語に、長田はなにを籠めたのだろうか。

心にゆとりをもつて余り不自由を気にせぬ事である。又、自分は白髪が増したので無理は出来ない。そろそろと一切の方面を清算して天国行きの準備も致して居り度い。とは、どうした境地だろうか。「斯ふして原稿を記す間にも＝俺は古びて居りはせぬか

⁸⁾ 阿部安成「死んだ穂波の横顔に一長田穂波探索」（滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.130、2010年4月）を参照。

＝若い文人達の奮起と社会への進出の意気を祈つてゐる」という長田は、このとき五十歳代なかばである。

文は人である。文を記す者は先ず自身を作るべきであると思ふ。文より文を書いた人物が社会的には、ものを言ふからである。／全国癩園に文人が甚だ藪く淋しい、進出の地は広い。青松同人諸氏の前途を祈る！！以上

と稿は閉じられた。

長田は「文人」を自認していたとあってよいだろう。文字を書きつづけること、思索しつづけること、わが身を省みること、みずからに課していた、とわたしにはみえる。

その長田の「島庵独語」第4回は、原稿用紙の裏に書かれていた。それは、「KYOKUTO 10×20」の印字がある四百字詰原稿用紙で、84 から 92 にまでのノンブルが手書きで欄外に記されてある。「十七、一夫多妻の禍」「十八、ぬすらえる」の見出しがみえるので、なにか信仰にかかわる文章の下書きだったのだろう。

笠居 号ノンブルが連続する 33 は、笠居誠一「短歌」。「大島青松園」の名が印刷された用紙の裏に短歌が 6 首——「夕光に御紋章燦と輝きて艦列徐々に瀬戸の海航く／宵月の島空高う敵機いま東北進すプロペラの音／息つめて敵機進入の情報聞き仰ぐ星空底黯う澄む／飛行雲成層圏に棚曳くに敵機の進路見極めんとす／量定の器物に盛りし朝の餉に向ひて今日の幸を祈れり／夕餉ひすまして思ふみ戦の中にかくまで恵まれし幸」——敵機を詠み、朝夕の餉^{かだい}の幸を言祝ぐ。

潮音 その裏がまた「潮音」——「◎二月下旬の普通作業の状況。今のところ作業数が二三五あります。一般の健康がおちたり何や彼で希望申請者が一五八名、さし詰七七たりません。四、五年前なら申請者が多くて割当にこまつたものだが、今昔の感、ウソのやうな真実である。元気な者は出るし、古い者は病気が重るし、何してもウツトウシイ話し。／毅然^{きぜん}たる戦時特別措置なき乎」との憤懣。

おそらく土谷が執筆したこの「潮音」の稿は、「大島青松園」の名が入り、「昭和 19 年 12 月 29 日」の日付がある（数字のみ手書き）、食糧配給にかかわるとおもわれる文書に貼りつけてある。「池田」の陰影のいわゆる三文判が押ししてある。

浅野 号ノンブル 35 から 38 までは、浅野繁「雑炊譚」——「冬いよよ焚き慣れてける

雑炊の甘藷の甘さをしみじみと食す／○癩院の冬は隣も雑炊を焚きつつあらし香にただよはす／昏れ方を海は風ぎにけり背戸毎に雑炊を焚くけぶりあげそむ／○背戸毎に竈築き並めはやはやと夕べは焚けり雑炊を香に／○ともしきを吾妻も言はねなごみつつ大根雑炊をほかほかと食す／今日生きて孀と対き食す塩雑炊の大根の白さ齒に沁みにけり／敵遂ひにルソソに寄すと聴きしより激る思ひは幾夜眠しめず」。

つづいて「アルミ貨幣回収」の題で、「たなぞこのアルミ貨幣を瞻りつつまきびしき世にいまは憶せず／回収のひたにせかるるアルミ貨を明日かへすべくしみじみと数む／たたかひに遂ひに召すなきうつしみのわがつく息も憚らむとす／痾むいのち任のまにまに爆ぜたきを真夜の鎮みに思ひ支へつ」——回収されるアルミ貨幣に照らしてわが身の憂いをつくづくと吐く、痾むいのちが爆ぜるとはどうしたようすを想定したのだろうか。

浅野の稿の最終ページは、「多磨詠草紙」の名が印刷された原稿用紙だった。

笠居 「愚感」と題された笠居誠一の散文は、3枚の紙に記され、二つ折となった各面に号ノンプルが39から44まで記されている。

「紙も弾丸である」と書きだした笠居は、「祖国はまさに隆替の岐路に立つ重大決戦中の決戦である」と現時をとらえて戦場と戦局を記し、「総蹶起、総力戦」のこのとき「皇軍の将兵は皆体当精神で戦ふて来て居ると思ふ、現在では国民一億総体当りで自己の職場に田に畑に働いて居る事は誠に心強い限りである」のだが、「然し新聞の声には今尚闇や物の横流れが行なはれて居る」と憂える。

そうしたところ、「先日も兵庫県仮屋町の某氏が拙著松籟の残本があるならば送本を願ふとの手紙に、私は松籟と緑野を送った」という。こうした療養所内外の、私の、交流があったことを笠居の稿を伝えている。

その某氏は、「非常に喜んで返事をくれたが、彼は肉身に一人の頼る者も無き孤独の故に、胸の病気で働く事の出来ない、毎日の食事も取る事が出来ぬと次ぎの短歌を記してあつた」という。その短歌は、「天地に只一人なる寂しさを味ひ生きて神は尊とし／仮屋町に只一人住居は減食の不足えられず先づ斃れなむ」の2首。笠居が「右を、短歌を読みつゝ静かに自己を反省させられたのである」というその中身は、

私達は毎日三度の食事をして居る、物の不足らは言ふべきで無い、感謝しつゝ毎日の生

活を明朗になし祖国の弥栄と皇軍の大勝を祈る使命を感じ祈りの体当り精神を裏に燃やすべきであると思ふ

とのこと。笠居はまた「前号で土谷君は文は人なりと言ひ、長田大兄は言葉の空手形でなく実行者たれと言はれた」と、『青松』のさきの号を参照したうえで、「私ら癩者が忠君愛国を語るとも言葉と行為の一致がなければ空の空なりと言ふべきである、将軍歌人斉藤瀏氏は短歌は体当りの所産なりと言ふ。この言葉は作歌する者の熱読翫味すべきである」となえる。

ついで笠居の短歌論が展開する——「私は短歌は生命であり、霊の叫びであり、人間修養の道である、是は宗教に入る道であり、唯神の道であると、信じて居る。短歌が単なる遊びであり趣味であるならば、表現技巧に優れても体当りの精神はなく、生命をうちこんだ作品でなれば共感が持てない」と論じ、さらに、「神鷲の短歌を読む時に表現技巧には今一考と思ふ短歌でも尊い貴品と迫力を感じ、涙もろい私は新聞の上に涙を落とし眼鏡の曇りをぬぐふ時がある、それは何故か、体当りの精神であり、霊の叫びであるからである、此の決戦下、紙も戦ふて居る時に文学する者は体当り精神を打ち込んだ作品を発表すべきである」との主張が発せられたのだった。くりかえし記される「体当り」の語。「神鷲」とも讃えられたいわゆる神風特攻という現実の戦闘が、日々の糧をまがりなりにも得られる療養所に暮らすものをして、「紙も弾丸である」「紙も戦ふて居る」といわしめたのである。「私ら癩者が忠君愛国を語るとも言葉と行為の一致がなければ空の空なりと言ふべきである」と強く自覚する療養者にとっては、「紙」を「弾丸」として、「紙」の闘いをくりひろげなければならない、彼らは（そのほとんどが男だった）、そう考える戦時を生きようとしたのである。

笠居は自己の作歌をふりかえるとともに、それを読者にみせる——「私は昭和十年に水甕社々友となり一回の休詠もなく続けで来た、是れが遊びや趣味で出来る者では無い、私には短歌が生命であり宗教に通づる霊の叫びである」。そうした姿勢をとるものからすると、「戦争下には戦ふ国民としての短歌を作りたい、それは戦争の短歌でなく（ても）花鳥風詠の短歌でもよい、戦ふ国民であると言ふ自覚を持ち題材に体当り精神を打ち込むで行く所、自然と高い音は出ると信じる、貧しい私が短歌の結社に入り出詠を持続して来たのも

現今の言葉で言へは、体当りの精神であると言へると思ふ」と、ここでも「体当りの精神」の語がまた記されて、自己の姿勢がその語に託されている。

笠居はいう——「誌代に苦心した事も度々あり、苦難の道であり、茨の道であつたが、今静かに過去十年間を省みて感謝をなし祈りたい心になる、私は今後も世の中の暗い方面には眼をつぶり明るい方面を見つめ、明朗にして平明なる歌の中に私の個性を生かして行きたい、私は青松と共に成長し青松と苦楽を共にしたい」との、希望、決意が示されたのだった。その日付は、「二月十一日夜記」と記された。当時という紀元節の夜のことだった。

田根正夫の短歌 2 首が、笠居の稿末尾の余白に貼られた紙片に記されていた——「灯火管制厳たる寒夜は空深に星座の光のするどさの頭つ／純忠の極みと云はむ敵中に爆ぜし勇士に想ひ極まる」。

その裏 笠居の稿は、「笠居誠一用紙」と印刷された四百字詰原稿用紙 3 枚の裏に記されていた。その原稿用紙には、ノンブルが 18 から 20 まで記されている。罫目のあるほうの面はいくつもの短歌で埋まっている。欄外に「○」の記号や「再」の文字がついた歌がいくつかある。

○ 青々と真澄める空ゆ雪花をタベ散らせて寒波至りぬ／○ 溪あひの青空深し羽叩きて立つひよどりの姿を見に追ふ／再 つきつめし想ひの果に縊れしが書置きの字に偲ぶ人柄／鉄窓に面近よせて空仰ぐ狂人の瞳のうつろひ寂びし／再 うつつに面浮び来て弔文を読む己がこゑのひびく空しさ／御柩の十字架に淡き灯の光や春夜を守る人ら眠れり／訃を聞けど諾ひ難く閉づる眼に面うつくしき人うかび来る／絶対安静をのらす医師の面影が視覚の中に仄々とあり／再 音高く火屋の扉を閉す際の心に沁みる面影あり／肉に射す注射の痛さにたへにつゝ天井板の柁目見つむる／

——ここに戦時の歌はひとまずない。つぎにノンブル 19 がついた原稿用紙。

○→再 枕辺のバケツに喘ぎ吐きつぎし血のかたまりて黒々と見ゆ／○→再 現身の力ほとほと失せにつゝ生きたき願ひ強く湧く朝／○→再 いくばくの人死逝きし病室の古きベッドに移されて来し／愛情の言葉身に欲る春の夜のベッドに独り波の音きく／△ 毒呑みてこれのベッドに死逝きし人を思へり夜半を目醒めて／ある時は歌論に夜を更したる山本徳朗此処に死たり／再 死の翳のさかりゆく日は只生きむ願ひに粥の湯を欲りて

呑む／再 粥の湯にそこばくの実をゆるされし夕餉に向ふ心華やく／再 癩われ生きむ希
ひに戴きし薬の目盛りうたがはず呑む／注射跡の痛きに指触れみつゝ 昼を静かに眠るひ
ととき

——ここにも療養、死、病が詠われている。つぎにノンブル 20。

○ 病室の夜更を醒めて下湧ける祈~~心~~心は生きぬ希ひか／臥りみて十日経る間に療院の
庭の桜は花過ぎにけり／夕昏れに訪ひくれし若き娘は白粉の香を残し行きけり／◎ 血
を吐けば~~病~~病弱くなれり音信をたちて久しき故郷へ文書く／再 映し見る鏡の中の青
き顔に血を吐きし夜を思ひ恐るる／馬刀を突く舟の女の唄ふこゑ乗せてうらゝに潮流る
る／面白と朝鮮舞踏見つゝみて民族意識に想ひかかはる／◎ 花すぎし桃の畑は下土の
白きが匂ふ陽に乾きつゝ／◎ 野の匂ひ身に親しもよ草萌る径は桃咲く丘につゞける／
柿若葉の匂ひしるけき山畑に蹲り居て囀りを聞く

——◎がついた 3 首のうちの 2 首は、療養、死、病とはひとまず無縁の世界が読まれている。

喜田 号ノンブルがつづく 45 と 46 は、喜田正秋「自句自解（一）」。まず 1 句、「鮎汲
や瀬の名に鮎と呼び古りぬ」。大島で鮎はとれない。川がないから。これはどこの句か？。

洛西保津川の上流に一部の人達から小鮎と呼び古されてゐる瀬がある。瀬に付けられた
通称に違はず陽春三月ともなれば川上に遡る若鮎が背に押寄せ、飛び上り、飛び上りす
る様は実に見事なものである。鮎漁解禁ともなればよく釣に出掛けたものだ。

とは、彼自身の体験にもとづいた句作だったのだろうか。

この句を投稿したところ、「果して先生は良しとして採って下さった。楽に出来た句が光
明集に採られたよりも苦心の末出来たこの一句がどれほど嬉しかったか、今に忘れられな
い思出である」とのこと。

子ども つぎからは号ノンブルがない、柵目と欄外に「昭和 年 月 日」の文字が
謄写版刷りで印刷された原稿用紙がつづく。まずは、「高一 戸田次郎」の「決戦下の正月」。

「高一」とは国民学校高等科 1 年のことだろう。「戦争治^始まつて以来もう四年目にもなりました」という現時において、「戦^上の兵隊さんは朝夕に毎日にくい米英軍とひつしの格^闘悟で
戦つてをりますのに、銃後僕達はあんらくに暮してはいけません、銃後は一層増産や勉強

にはげまなければなりません。〔中略〕銃後の国民が皆んな一つ心になつて色々なつとめにはげまなければなりません。／完り」との決意が綴られている。

このあとの子どもの稿にも、誤字の隣に正しい字が記されている。

つぎは、「高一 中島勇」の「昭和二十年を^迎（仰アフグ）へて」。「僕達はどんなに苦しくても石にかじりついても心を新しくして勝抜きたいと思ひます」との中島の意志に対して、「本当に頑張りくらべですね／字をもう少し丁寧書きませう」とのかんたんな所見が寄せられている。この文字は、さきの正誤表記も、林文雄のペンとおもわれる。

つづいて、「六年 庫元和恵」の「玉廻し」。庫元は国民学校初等科 6 年か。玉廻しとは、「兎になつた人が目をつむつて居る時、玉を廻して兎がどんと言つた時、玉を持つて居る方が歌ふのです」とのこと（「歌」の字の旁がノブンになっているので正しい字が記されている）。これを「岡本先生や奏兄さん、少女室みんな玉廻し」をしたという。「はじめに先生がごろごろをしました。すると久子ちゃんにあたりました。久子ちゃんわ軍艦とゆう歌を歌ひました」と綴られる。

この稿には、「この島に来て初めて中の子供の生活を書いた作文に接した、良く書いてみる。誤字も一番勘い／歌と云ふ字、これから決して間違へないやふに。／最後の御蔭と云ふ字もあとで正しく直したらしく／その態度がうれしい／この様な子供の生活を書いた綴方が望ましい。林／私[◎]はです、わ[△]ではありません」とある。

やはり、末尾のひと言は林によるものだった。

あとがき 署名は「勉」とあり、土谷のペンによる「あとがき」。

第四巻を久米大兄の英霊追悼号にしました。中途から思ひついたので、足らぬ処が後から気につき不十分な始末になりました。稿をよして下さつた皆様に相すまないことだと悔いてをります。

と始まった「あとがき」はついで、号末尾の子どもたちの文章にふれ、

◎学園から岡本先生のお骨折で綴方を三人いたゞきました。次には書画も一緒にいたゞくことにしました。

という。つぎに追悼号のこと——「◎私が足が痛いので追悼号にすることを回章で御願ひしたにもかゝらず、本号は常に倍する各方面の御原稿にあづかりました。何よりもうれ

しいことです。神州不滅の信念をいよいよ固めさせられます。／◎時局はいよいよきびしくなりました。敵機の頻襲は云ふまでもなく、イオウ島の上陸が報道されます。吾々の決意また新の筈です」。

号の構成について、「◎潮音には出来るだけ消息＝ごらんの通りを書きたいと思つてをります。私が忙しいので意にまかせないかも知れませんが、出来るだけ何かの参考までにつづきたい念願です」。

季節について、「◎“梅一輪、一輪ほどの温かさです。何より吾々には寒冷が禁物です。同人も元気を倍することと思つてをります。健筆のほどこそ希ましい」。

つぎの「◎青山荘主人の御感想、いつもいつも有難うございます。本号もお願いしたいものです」とは林文雄への謝辞。「本号もお願いしたいものです」というからには、この時点では未記入か。「◎三号には園長先生まで御感想を書いて下さり、一同はりきつてをります。謹んで厚く御礼申し上げます」とは前号への園長寄稿に謝辞。

最後に、「◎本号の編輯にはあたつては発刊以来、ズット石本さんの御指導をいたゞいてをります。本号も亦同様です。出来るだけ病友諸君の心だ＝と希ふや切。(勉)」

感想 「あとがき」の裏面には、土谷のペンで「◎この欄、御感想を何卒書きこんで下さいませ。御遠慮なく——」とあり、つづけて林の手で、「(狭い所ですが園長、両課長願上＝)別に紙にかいて／貼って下さってもよいです(林)」とある。ただし、この原稿用紙には、なにも記されていない。この号には、園長も両課長も記載しなかったわけだ。

そのつぎの「青山荘だより」が、さきに土谷が記した「本号もお願いしたいものです」への応答となる。

二日、風邪の枕元に土谷兄の手紙と青松かどゞいてゐいる、／青松とまではゆかぬが手紙だけハ早く見たいが三十九度近い上に汗バンで居る、手を出してはいかん、丁度家内も風邪で隣室に寝てゐる、娘は振仮名さへついてゐればよんでくれ様が、一寸勉兄の手紙は無理だらふ、「先生御用があれば何でもいたしますよ」釜野看護婦だ。／「あゝ丁度よかったね、この僕の顔の前にある手紙をよんで頂戴」／「ソリヤー」／「何でもいたしますと云ふたじやないか、それに看護学でどう習った、一ツ病人の意に逆ふべからず」／そしてポツポツよんで貰ひ久米大兄追悼号のなりたちをうれしく存じました、三日朝、

解熱、すぐ青松をよみ面識一二度の小生も＝兄の愛情に動かされて歌らしきものを贈りました。

とまずは土谷との交情を記す。

◎追悼号全巻に溢るゝ愛情、大島は未だ老ひずの感あり（率直に云ハしめよ）一文一句に批評すべきに非ざる敬虔を覚ゆ／◎俳人薫水、爽子ハ参加嬉し、皆で青松をもり上げやう／爽子の著ぶくれての二つ、寒月、水仙の句良し／著ぶくれて海鼠の桶をかゝへくる／簾なすハ正秋の独壇場／◎短歌は活気がある、浅野兄の雑炊の歌、何をよんでもしみじみとさせる／泉兄の「ひとゝころ」は美しいと見た／◎子供の作文が出てうれしい。／一度下書きを先生が見て誤字を直して教へる事、こゝの子供に誤字の多いのに驚く／◎蔵元和恵姉の玉廻しを見＝／本当に嬉しかった。ここから出発しなければみかん、子供に多に書かせて下さい／◎作文の紙も足りぬでせうが外科で備に使つてゐる古い処方箋の紙も一度裏を下書につかつてまとめて消毒してから使つても良いと思ふ、皆で頭を使つて少しでも長く持ちこたへる様研究して行かふ／◎科学（サイエンス）と化学（ケミストリ）と間違はぬ様、／誰でも持つてゐる机上辞典を見ても／科学（系統的学理のある学問）／化学（物質の元素や化合の状態を究める学問）とある／即ち／科学の中に／化学、物理、医学、其他／のものが入つて居るのでカ学的にとカ学するとか云ふのは皆科学です、大方の人ハ知つて居られやうがよく間違へるので為念

さて、つぎの「◎林兄の論文うれしく見た／歌にも文にも全人格が出てゐて有難い」とは、どうしたことだろう。青山荘とは林の号のはずで、ここにいう「林」と同一人のはずではないか。くちやくちやくとした小さな文字も林の筆跡のはず。この一項はよくわからない。ご愛嬌というところか。

つづけてまた講評となる。

◎喜田兄の自句自解、鳴野で拝見、感心した、あれだけの苦心あつて今日の正秋あり／我ら若き俳人軽々しく／筆を捨つべからず／◎木＝に俳人岩崎／花の幕水のほとりに／張られゆく／出征中／秋出水歩哨の兵の舟にのり／城内へ民の逃げくる／秋出水／など夏作を聞き感伏す／こゝに＝俳師あり／◎大島婦人俳句進境目ざまし／つらゝ折る若き駅夫やあぼし駅／紅梅に足をとゞめし京の母／寒ぼらを干せる官舎に母迎ふ／雪覆ふ屋

島を右に庵治峠／◎今日ハ雛の節句、子供らハ礼拝堂へ学芸に行き家に一人えんがハで
これを書く、時計ハ三時ソウソウラヂオを忘れまい
——1945年2月発行の第4号が閉じられた。